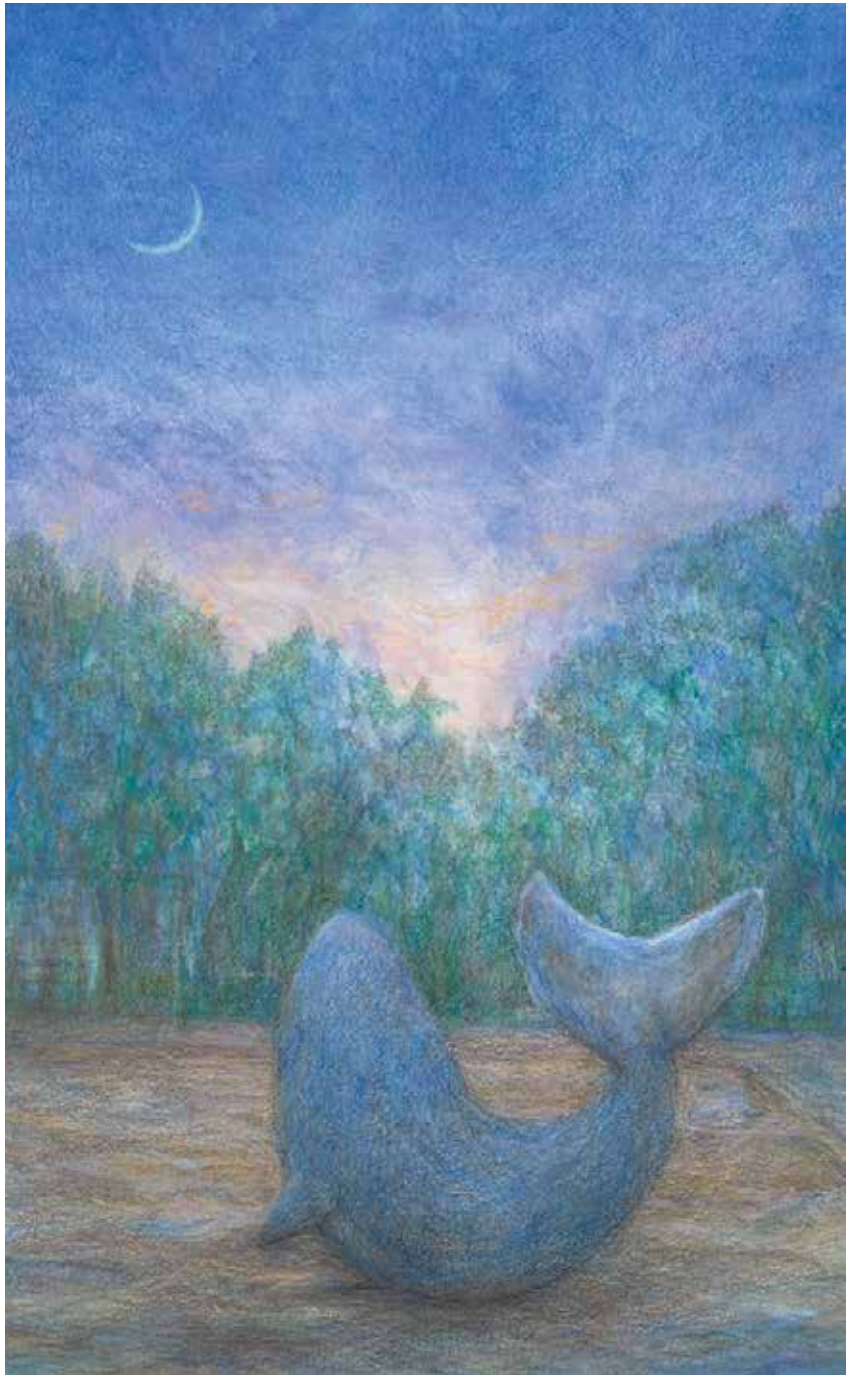




絵・よしだるみ

すなばのくじら ポポ よしだるみ

さようならの歌がひびいて、みんなが帰ってしまうと、公園はしんとしずかになりました。

すなばのくじらポポは、夕ぐれの空を見上げました。青い石のからだに、大きな黒い目。ひるま、たくさんの子どもをのせた背中が、まだほんのり、あたたかです。

そのとき、風がすーっとかけてきて、ポポのほつぺたについた砂を、そっとはらいながら、言いました。

「やあ、ポポ。今日ね、遠い海で、きみにそっくりなくじらに会ったんだよ。」

風はそれだけ伝えると、またどこかへすーっとかけていきました。

「海って、どんなところだろう。ぼくにそっくりな、くじらに会ってみたいなあ。」

深い、あい色の空に、細く白くひかりはじめたお月さまに、ポポはたずねました。

「ぼくのねがい、とどきますか。」

お月さまは、優しく答えました。

「まん月の夜。ひかりが一番強くなったら、砂と海をつないであげましょう。」

それからポポは、毎ばん夜空を見上げて待ちました。

お月さまは、夜ごとに少しずつ丸くなり、ひかりをふやしていきました。ポポのねがいも、お月さまといっしょに少しずつ、ふくらんでいきました。

そして、まん月の夜。ポポは、遠くからききなれない音がきこえてくるのに気づきました。

ざざざん。

ざざざん。

風がすーっとかけてきて、話しかけました。

「ポポ、ほら、海だよ。波音が、きこえるでしょう。」

「なみおと……？」

「うん。いつておいで。きっと、海のくじらに会えるよ。」

気づくと、すなばのむこうに、海がいっばいに広がっていました。

かたいはずのポポのからだは、なめらかにうごいて、たぶたぶとした海の水にふれました。

「わあ……！」

海の中には、たくさんの小さな生きもののけはいがします。ポポは、うんと大きくからだをのばしておよぎます。

海の中から見たお月さまは、ゆらゆらまるくゆれていました。波間から顔をあげると、そこには大きくじらがいました。

ポポは、ちょっとはずかしかったけれど、

「ぼく、ポポだよ。すなばから来たの。風さんに、きみのことを聞いて、会ってみたくて。」と言いました。

「ぼく、クルクだよ。やあ、ぼくら、なんだかそっくりだね。会えて、うれしいねえ。」

お月さまのひかりが、ポポとクルクを優しく照らします。

二頭のくじらは、しばらくなにも言わずに、ならんで泳ぎました。

ポポは、おなかにあたる波がくすぐったくて、そっと笑いました。

クルクが、すこしだけ速く泳



ぎました。

そして、ふわりと海の上へ、とびあがりました。

月あかりをあびた水しぶきが、ちらちらと夜空にひろがりました。

「わあ…！ ぼくも！」

クルクのようにしつぽをつかって、ポポもふわりととびあがりました。

波をこえ、すこしだけお月さまに近づいたような気がしました。

ぱしやん。

細かな波紋が、まるく広がりました。月のひかりにゆれる海を、ふたりは、ただ見つめていました。

ポポは、言いました。

「ぼくのすなばは小さいけれど、たくさんの子どもたちが遊びに来るんだよ。」

クルクは言いました。

「海は、広いから、ときどきしんとしずかなんだ。でも波がきらきらするのがとてもきれいなんだよ。」

「ちがうね。でも、いいね。」

クルクは、ゆっくりうなずきました。

「そろそろ帰らなくちゃ。またね。」

「うん、またね。」

波間のむこうに、すなばがうつすら見えてきました。

ポポは、見なれた景色を見つめました。

そのとき、クルクが言いました。

「また、会えるかな。」

ポポは、にっこり笑いました。

「うん。きっと、会えるよ。」

遠ざかるポポにむかって、クルクは大きくしおをふき、見送りました。

ポポは、いつものすなばにそつとからだを横たえました。すなばで、海で、ふたりはそれぞれ目を閉じました。

空には、まあるいお月さま。

はなれていても、同じひかり。優しくふたりをつつみました。

おやすみなさい。



ポポは少し、かんがえました。すなばは小さいけれど、にぎやか。海は、広いけれど、しずか。